まどぐち
親しみやすい図書館に
第144号　1989年　8月　1日発行
文京区立真砂図書館
文京区本郷4-8-15　☎815-6801

戦災と図書館

昭和19年（1944年）当時、東京には、中央図書館としての日比谷図書館の他に、27の都立図書館があった。けれど、学徒勤労動員通年実施（３月）、学童集団疎開開始（８月）など、戦時体制の一段の深化にともない、４月には国民学校に併設されていた13館は臨時休館＝閉館という事態に至り、その中に「小石川」「本郷」の両図書館も含まれていた。――なお、両館とも、明治43年（1910年）に、東京市立図書館として、各々、「小石川高等小学校」（昭和３年、窪町尋常小学校内に移転）「本郷高等小学校」（昭和７年、真砂尋常小学校内に、昭和８年、東片町に移転）に設置されたもので、開館当時は「簡易図書館」（利用上の手続きが簡易だという意味）と称されていた――

さらに、昭和19年11月以降、東京が本格的な爆撃にさらされ始めると、その被害は図書館も免れる所ではなかった。

20年１月、深川図書館被爆閲覧室大破につき臨時休館。３月、両国図書館他３館被爆全焼。「日比谷」「駿河台」「京橋」の３館を除くすべての図書館が閲覧を中止。４月、西巣鴨図書館被爆全焼。５月、日比谷図書館他６館被爆全焼。下谷図書館半焼。

こうして、終戦の日まで無傷であったのは、「駿河台」「京橋」「日本橋」「月島」の４つの図書館のみであった。なお、京橋図書館だけは、戦中戦後も休館することなく閲覧を継続していたという。

小石川、本郷の両館は被害程度は「小破」とされるものの、蔵書の約1/3 は失われてしまった。

「私達は民間重要図書を買上げ、疎開することによって、多くの文化財を戦禍から護ることができた。しかし、遺憾ながら莫大な既蔵の蔵書を焼失してしまった。戦争が長期にわたって持続されるものと考え、都民の文化性擁護の立場に立って、頑強に閲覧を持続しようとして、疎開を躊躇したことによる失敗であった。戦災前の都立図書館には七十四万冊の蔵書があったが、戦火災によって四十万冊を烏有に帰せしめてしまった。」とは、当時の日比谷図書館の中田邦造館長が、あとに語った言葉である。

館員たちが何日もかけて、荷車を引き、疎開させて守った図書も、決して、少なくはなかったけれど、東京の図書館が戦災で失った蔵書は大きかった。それは、かつての関東大震災のときの損害の規模（約十万冊）をはるかに上回るものであった。

やがて、昭和22年に、小石川図書館は文京区立図書館として開館、本郷図書館は従来通り、都立図書館として再開され、今日への歩みを改めて始めることとなる。

<菊富士ホテル>物語（7）

三木　清　哲学者　明治30（1897）年～昭和20（1945）年

日本における歴史哲学の開拓者として、思想界に大きな足跡を残している三木清の歩みをたどる時、それが言論の圧迫のもとになされたことに注目しておかなければならない、と言われている。

兵庫県の農村に生まれた彼は京都大学哲学科を卒業し、第一次世界大戦後のヨーロッパに留学する。大正14（1925）年に帰国し、やがて、昭和2（1927）年に上京し、法政大学教授、日本大学、大正大学講師を兼任する。この昭和2年から2年間ほどの間、三木清は菊富士ホテルの十六番という部屋に住んでいた。論壇の寵児として活躍すると共に、岩波文庫を発案したともされている。無口でおとなしかった彼の所へは岩波書店からの使いの人がよく来ていた、と言う。

その後、昭和5（1930）年、治安維持法違反で起訴され一切の公職より追放される。そして、17（1942）年には陸軍報道班員に徴用され、マニラに行くが、やがて、20（1945）年、再び治安維持法違反容疑で検事拘留処分となり、敗戦後も未釈放のまま、9月26日中野刑務所で獄死した。

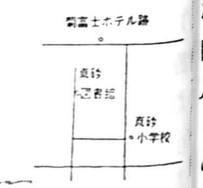
その著作は『三木清全集』（岩波書店）などで読むことができるが、「断念することをほんとに知っている者のみがほんとに希望することができる」（『人生論ノート』）とは、彼の、時代をのり超えようとする意思の表明でもあったのだろうか。

（T・S）

菊富士ホテルとは――

大正3(1914)年、地上三階地下一階、屋上にはイルミネーションが輝く、ホテルとして建てられた。やがて、長期滞在客相手の高等下宿屋として営まれていくようになり、その自由な雰囲気を好む作家や学者たちが数多く、住み続けた。昭和20年(1945)3月の空襲により焼失し、今は、記念碑が建つのみとなっている。

（本郷5-5オルガノ会社敷地内）



季節のうた　八月

露草や濃淡絶し今朝の空　中村草田男

露草も露のちからの花ひらく　飯田龍太

どこの道ばたにも咲いているが、よく見るとおしゃれな花。二枚の花びらの青らしい青の冴えもさることながら、飾りのような六本の黄色い雄しべがパキッと合っている。夏のスポーティなカジュアルルックを思わせる。

（S・K）

私の本棚から　（14）

したたかな庶民の戦中戦後

「欲しがらないでいきてきた」著者　木乃美　光　出版社　光文社　分類２１０７

この本は、第一章・軍国少年で生きてきた（昭和12~16 年）、第二章・生きているのがふしぎだった（昭和16~20 年）、第三章・ガムシャラに生きてきた（昭和20~25 年）、の構成で全体が210 ページあり、気楽に読めるよう書かれている、しかも、マンガ家の故、手塚治虫氏が次のような推薦文を載せています。「戦争の悲惨さを謳ったものは数多い。その悲惨さ、バカらしさゆえに反戦を訴える人も多い。その点、この本は異質だ。声高に反戦を叫ぶのでもなく、ことさらにその悲惨さを言うのでもない。漫画家を目指す少年だった著者の視線は、戦争という極限状態の中で、たくましく生きる市井の人々に注がれ、戦中戦後の逼迫した生活を送る母や子を見事に活写している。」

戦後40数年を経て、日本中が豊かになり、食べたいものが食べられ、着たいものが着られる社会になったが、この本にあるような生活を、私たち日本人誰もが、ついこの間までしていたのだということを忘れないためにも親子で読んで欲しい一冊です。なお、あとがきも是非、よんでいただきたいもの・・・・。（N・I）

ベストリーダーはこれ！！(3)

日本の小説

1	ノルウェイの森	村上春樹	講談社	Fム
2	鞭の浦殺人事件	内田康夫	徳間書店	Fウ
3	竹人形殺人事件	内田康夫	中央公論社	Fウ
4	日光殺人事件	内田康夫	光文社	Fウ
5	子供部屋のシャツ	赤川次郎	文芸春秋	Fア
6	春の砂漠	平岩弓枝	文芸春秋	Fヒ
7	一両二分の女	平岩弓枝	文芸春秋	Fヒ
8	さびしい独裁者	赤川次郎	徳間書店	Fア
9	志摩半島殺人事件	内田康夫	祥伝社	Fウ
10	逃げこんだ花嫁	赤川次郎	実業之日本社	Fア

最も、利用者の方によまれた小説は「ノルウェイの森」村上春樹著、であった。この作品は著者の自伝的小説となっており、この館で61回貸出された。また、村上春樹の「ダンス・ダンス・ダンス」も26回貸出されている。

現在、若い人々を中心に最も読まれている吉本ばななの作品は「うたかた／サンクチュアリ」が22回貸出されている。その他で特長的なことは、ミステリーの作品が20位の中で15をしめている。これらの作品は主にサラリーマン層に利用されている。

根津図書コーナーから＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

根津コーナーで戦災時の話しを聞いてみました。

３月の空襲で上野が焼かれたが、焼跡に停留所だけが何故か残っていた。団子坂から神明町車庫あたりまで焼けたのに根津地域は戦災から免れた。あとで聞くと東大があったためだという。団子坂方面が焼かれた時、焼夷弾が花火のようにきれいだったが何故か危機感はありませんでした。（７９才）

山梨県に田舎があったが夫が軍籍のため疎開ができず根津にいた。湯島小学校が警備の詰所であり、夫は空襲警報が鳴ると詰所に行き子供がいない自分は一人で留守番をしていたが不思議と怖くなかった。（７６才）

長野の千曲川の近くに疎開をした。子供が５人いて食べ物が心配だったが田舎の人が親切で子供にだけは食べさすようにと気を使ってくれたのが忘れられない。翌年には根津に帰ってきたが幸い家が残っていた。（７７才）

根津神社の木の側に防空壕を掘ったが、樹木が多いせいか水が出て使いものにならなかった。（８０才）

平和な今を、根津地域を慈しむ話し振りがとても印象的でした。（Ｓ・Ｈ）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

まちかど往来 《１５》 東京大学をたずねて

東京大学を訪ねてみた。最初に目に入るのが、そのシンボルともいわれている赤門（国重要文化財）である。文政11年（1828）の建造で、11代将軍家斎の娘が前田家に嫁入りしたが、将軍の娘が三位以上の大名に嫁したとき御守殿と呼ばれ、この御守殿が出入りするために造られた門を御守殿門といった。朱の漆で色どられたので、表門の黒門に対して赤門と呼ばれている。

赤門を通ると並木道があり、左右に中世ヨーロッパ風の法学部の建物が続くと、急に視界が広がり目の前に安田講堂があった。改装のため足場が組まれ、なにか、安物の服でも着ているように見えたが、それでも、ゴシック風な建築からくる風格や威厳が感じられる。10数年前、学生達が立て籠もり”時代”と向かい合ったのが、今は昔の思いがしてくる。

そして、その安田講堂から見下ろされる位置に夏目漱石の名作「三四郎」（明治41年）の舞台とされて以来、誰れいうとなく呼ばれている”三四郎池”があった。

この東京大学の構内を散策するとき、江戸、近代、現代という時代が交錯する、そんな文化を感じることができる。

（Ｙ・Ｎ　Ｔ・Ｓ）